

(12) 生物学教育部会

教育部会名	生物学
部会長名／作成者名	深城英弘／深城英弘
概 要 (2 ページ)	

(1) 組織・運営について

令和4年度の生物学教育部会の運営は、理学研究科主配置の部会長に加え、人間発達環境学研究科1名、理学研究科1名、保健学研究科1名、農学研究科1名、バイオシグナル総合研究センター1名の計6名の幹事によって構成される幹事会メンバーを中心とし、大学教育推進機構の専任助教がこれを補佐する体制で行ってきた。部会長は定期的に開催される教養教育委員会および同事業専門委員会に出席し、幹事と情報を共有するとともに、現場の教育実施を念頭に、部会におけるカリキュラム編成、非常勤講師やTAの採用、自己評価・報告の取りまとめ等にあたった。組織運営は幹事会でのメールでの議論を基本とし、必要に応じて幹事を通じた部会メンバーへの情報の周知、意見収集を行った。また各部局内での調整は基本的に幹事に依頼し、部会長が全体の取りまとめ・調整を行う形で、これまでに確立された効率的な組織・運営体制を継続することができた。今年度も新型コロナウイルス感染症への対応のために、種々の連絡事項、調整事項が発生したが、各幹事を通じて各教員との連絡調整を十分に行うことができた。また実習科目である「生物学実験1」および「生物学実験2」の実施にあたっては、専任助教を中心にその安全で効率的な実施について点検を行い、担当教員との連絡、必要な備品および消耗品の整備を行った。

(2) 実施状況について

生物学教育部会に所属する教員は、基礎教養科目「生物学A」「生物学B」「生物学C」、総合教養科目「地球史における生物の変遷」「生物の環境適応」「人間活動と地球生態系」、共通専門基礎科目「生物学概論A1, A2」「生物学概論B1, B2」「生物学概論C1, C2」「生物学概論D1, D2」「生物学概論E1, E2」「生物学各論A1, A2」「生物学各論C1, C2」および「生物学実験1, 2」を担当している。教員の異動・退職による微増減はあるものの、構成員数はこの数年間ほぼ横ばいで推移している。さらに非常勤講師が、「生物学各論B1, B2」「生物学各論D1, D2」「生物学各論E1, E2」の授業の全部、および「生物学実験」の一部を担当した。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、一昨年度と昨年度は多くの授業科目がオンラインでの開講となった。一方、本年度はほとんどの授業科目が感染予防対策を講じた上で、対面授業となったが、授業振り返りアンケートのコメントからは、学生からは概ね好評であった。一昨年度と昨年度の2年間で学生、教員の双方が利用方法に習熟したBEEFやZoomなどを有効に活用しながら、対面の授業を進めることができたことも大きな要因だと思われる。令和5年度以降も、対面授業による講義・実験を行うことになるが、オンライン授業で得られた資料の活用法などを、引き続きうまく利用して講義を進めることが望まれる。

また、振り返りアンケートの結果、本教育部会が担当した科目について、それぞれの授業を総合的に判断して有益であったかどうかを問う設問では、多くの学生が「有益であった」か「どちらかと言えば有益であった」と答えており、講義内容などは概ね適切であったと考えられる。授業の理解度についても、前期、後期を通して「良く理解できた」、「どちらかと言えば良く理解できた」の回答があり、学生の理解を満たしていると考えられる。

(3) 課題について

生物学教育部会では、昨年度外部評価を実施した。その結果、(1) 総合教養科目における内容の偏り、(2) 共通専門基礎科目における科目の共通性、(3) 学生アンケートの回収率、(4) 一部の科目における学生からの評価のばらつき、(5) 全体としての受講者数の少なさ、(6) 教育部会の構成、(7) ポストコロナへの授業体系の構築に関する改善点の指摘を受けた。これらの指摘事項に関して、部会長・幹事を中心に検討を進め、(6) 教育部会の構成については、令和5年度からバイオシグナル総合研究センターより医学系の教員2名を増員して、教養科目の授業内容のバランスを改善する予定である。

また、ここ数年は部会でのFDを実施していないが、評価の高い教員の講義技術の共有やオンライン講義における資料の著作権問題などに関するFDの実施などが求められる。

(4) 総合所見

上述したように、概ね生物学授業・実験の設置目標をクリアできていると判断する。ただし、課題としてあげた項目について中長期的な視点での対応が必要であると考えられる。

A 組織構成と運営体制について

- ①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか (100字程度)

各研究科・部局等から部会幹事を選出し、幹事会を構成した。種々の連絡、調整事項について、部会幹事を通じて適切にメール等を用いて連絡、調整を行うことができた。

根拠資料

教育部会構成員名簿

B 内部質保証について

- ①学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか (100字程度)

学生の意見の収集の機会は、授業における課題や授業振り返りアンケートに設けている。授業振り返りアンケートについてはすべての内容を部会長が確認しており、必要に応じて担当教員に改善を求めることのできる体制をとっている。また、各教員もそれぞれに自主的に改善を図っている。

根拠資料

課題コメント欄、授業振り返りアンケート結果

- ②自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか (150字程度)

自己点検・評価により認識される問題点は、それぞれの担当教員に帰属するものと教員すべてに共通するものがある。これらの要因を、授業振り返りアンケートに基づき、認識することで、その改善に取り組み、その成果進捗は次年度のアンケートで再確認し、さらなる改善に務めている。

根拠資料

前年度までの自己点検・評価報告書、シラバス (今年度の工夫)

- ③授業の内容及び方法の改善を図るためのFDを組織的に実施しているか (100字程度)

今年度は部会としてのFDは実施していない。ただし、昨年度(令和3年度)は外部評価を実施し、課題の洗い出しを行うことができたため、来年度以降に課題の解決に向けたFDの実施が必要であると思われる。

根拠資料
外部評価報告書

- ④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるとともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか（100字程度）

生物学の履修は、講義形式の知識育成・概念把握のみでなく、実験をとおして講義内容の把握、生物学研究を行うための基礎技術習得が不可欠である。このため、実験実習に特化した教員の配置、実験補助の配置を行っている。また、実験補助員は短期雇用のため、新任には十分な研修を行って授業にのぞませている。

根拠資料
神戸大学 SA/TA 実施要領・ガイドライン、SA・TA 採用者名簿、TA ハンドブック

C 教育課程と学習成果について

- ①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっているか（100字程度）

基礎教養科目では、生物の多様性、遺伝子、細胞の構造から機能まで、生物に関する基本的な知識や考え方をトータルに学ぶ授業内容となっている。総合教養科目では生物の進化や多様性のほか地球環境の保全や持続可能な発展という人類全体の課題にも触れ、自然界について自らの問題としてより良く理解できるよう授業が展開されている。共通専門基礎科目では、専門教育を受けるための準備や導入として各学部で学ぶ専門科目との連携を考慮した授業を行っている。

根拠資料
シラバス、課題、講義資料

- ②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか（100字程度）

学生の履修基準が示されていることを教員が理解し、その達成のための授業の工夫（シラバスによる明示、小テストなど）がなされている。

根拠資料
シラバス、小テスト、レポート課題

- ③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか（100字程度）

授業科目の内容はシラバスに詳述されている。共通目標や個々の到達目標が明示されており、学生自身が単位修得のための理解度を自覚できるようにしている。

根拠資料
シラバス

- ④単位の実質化への配慮がなされているか（100字程度）

講義内容の全体像、授業内容、予習、復習などについて、シラバスで提示している。また、小テスト、レポート課題を課すなど、単位の实質化には担当教員が工夫を行っている。

根拠資料
シラバス、小テスト、レポート課題、BEEF のアクセス記録

- ⑤教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか（150字程度）

基礎教養科目および総合教養科目では基礎知識や発展的な知識を効率よく学ぶため、講義形式の授業を行っている。共通専門基礎科目については、各学部での専門科目につなげるため、講義と実験を配置し、バランス良く学べるよう工夫している。

根拠資料

シラバス、講義資料、小テスト、授業記録

- ⑥シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前・事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（50字程度）

シラバスの必要な項目については記載されている。

根拠資料

シラバス

- ⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか（100字程度）

学生ニーズに合わせた教員配置の判断は、授業振り返りアンケート内容で行っており、各授業内容を把握し優れた専門性をもつ教員配置を行うよう努めている。アンケート内容は部会長が確認しており、必要に応じて改善を求める事ができる体制が取られている。

根拠資料

授業振り返りアンケート、シラバス

- ⑧学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか（100字程度）

講義科目ではシラバスにオフィスアワーを掲載しており、メール、BEEFなども介して質問受け付けの門戸を可能な限り開いている。実験科目に関しては大学教育推進機構所属の助教が実習内容、レポート執筆等の質問を電子メールおよび生物共同教員室にて適宜受け付けている。

根拠資料

シラバス

- ⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか（100字程度）

科目単位で成績評価の適正さについて自己評価を行っており、各教員が適正であると自己評価している。優および秀の比率に関しては、概ねガイドラインに沿っている。

根拠資料

シラバス、提出課題、テスト答案、レポート、成績分布（教養教育委員会資料）、出席簿

- ⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか（100字程度）

学生授業振り返りアンケートの集計結果や小テストなどのコメント欄を見る限り、それぞれの科目において適切な学習効果が得られている。ただし、個々のコメントを見ると同じ授業でも授業が難しすぎると言うコメントと、興味深く有意義であったとのコメントが相半ばしていることがある。受講学生の高校での生物の履修の有無による履修開始時の知識や興味によって理解度に差が出るものと考えられるため、出席率、受講者の成績、授業態度など、多方面から注意深く学修成果を評価していく必要がある。

根拠資料

小テスト、テスト答案、レポート、提出課題、授業振り返りアンケート結果、遠隔授業のチャット記録、BEEF のコメント欄、質問受付フォーム、学生からのメール